

## 第 18 回関東小児整形外科研究会

当番幹事：笹 益雄(聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院)

日時：2008年2月9日(土)

場所：大正製薬(株)本社1号館 9階ホール

### 一般演題Ⅰ 座長：西須 孝

#### 1. 肘に発生した腫瘍様石灰化症の1例

神奈川県立こども医療センター整形外科

○宮坂康之・町田治郎・中村直行

山口 優・奥住成晴

腫瘍様石灰化症は関節周囲に広範な石灰沈着をきたす原因不明の疾患であり、我が国では比較的まれである。今回我々は肘に発生した腫瘍様石灰化症の1例を経験したので文献的考察を含め報告する。

症例は11歳、女児。右肘部の母指頭大の腫瘍が増大し、当院受診した。右肘部に辺縁明瞭、無痛性の凹凸腫瘍を認めた。単純X線では多房性腫瘍陰影を認めた。MRIでは筋層内、骨への侵襲はみられなかった。血液検査所見では、抗核抗体のみ陽性であったが、膠原病の診断には至らなかった。腫瘍摘出術を行い、病理所見も含め腫瘍様石灰化症と診断した。今後再発、膠原病の発症に注意し、長期の経過観察が必要である。

本邦小児報告例は自験例を含め12例のみで、平均発症年齢は9歳であった。発生部位は肘関節が6例で最も多かった。腫瘍様石灰化症の診断には混乱がみられているが、慢性腎不全、膠原病、代謝疾患を有するものや小さな皮膚石灰沈着症は除外すべきである。

#### 2. 椎弓発生と思われる頸椎 LCH の1例

東京都立清瀬小児病院整形外科

○古谷 晋・下村哲史・渡辺航太

#### 3. 先天性股関節脱臼における徒手整復症例の治療成績

千葉県こども病院整形外科

○川村剛以・亀ヶ谷真琴・西須 孝

高澤 誠

### 一般演題Ⅱ 座長：伊部茂晴

#### 4. 大腿骨頭すべり症の小経験

聖マリアンナ医科大学整形外科

○石井庄次・増田敏光・星野克之

阿部恒介・別府諸兄

#### 5. 大腿骨を中心とした無菌性骨髄炎の1例

自治医科大学子ども医療センター整形外科

○井上真紀子・渡邊英明・雨宮昌榮

吉川一郎・刈谷裕成・星野雄一

### 6. JRA の予後に関する検討

千葉県こども病院整形外科

○高澤 誠・亀ヶ谷真琴・西須 孝

今回我々は当院における JRA の治療成績から予後とリスクファクターについて調査検討を行った。対象は1989～2007年に加療した JRA 47例、男児11例、女児36例で発症年齢は平均5歳、経過観察期間は平均4.5年で病型分類は全身型11例、多関節10例、少関節型26例であった。X線評価には Larsen 分類を使用した。予後不良因子の検討には重回帰分析、相関分析を用いた統計学的解析法を行った。

【結果】X線上関節内変化を46%(22/47)に認めた。そのうちの6例には鏡視下滑膜切除術を施行し、5例が症状改善、1例が増悪を認めた。予後不良の因子としては重回帰分析から股関節罹患の有無、手指関節罹患の有無、発症年齢が採択された。また薬剤投与までの期間や MMP-3 も最終治療成績と非常に強い相関を認めた。

薬剤治療に抵抗性の重症例に対し、関節機能の温存をめざした整形外科の治療は有用であった。

### 7. 骨端軟骨部慢性骨髄炎に対する鏡視下手術の長期成績

千葉県こども病院整形外科

○西須 孝・亀ヶ谷真琴・高澤 誠

帝京大学ちば総合医療センター放射線科 渡辺淳也

千葉大学大学院医学研究院整形外科

落合信靖・高橋和久

成長骨端軟骨部の慢性骨髄炎に対して鏡視下手術を2例に行い良好な成績を得た。

【症例1】2歳、男児。左大腿骨遠位部に腐骨を伴う骨溶解像あり。骨幹端に2つのドリルホールを開け、ここから関節鏡、鉗子を挿入し、生理食塩水還流下に病変部を郭清した。病理診断では結核が疑われたが、薬物療法は行わずに経過をみた。4年8か月の経過観察を行ったが、再発はなく、変形や脚長差も全く認めなかった。【症例2】5歳、男児。右胫骨近位部に腐骨を伴う骨溶解像あり。既に結核性骨髄炎の診断を受けており、透視下郭清術を2回受けたが再発し瘻孔形成がみられた。症例1と同様に鏡視下手術を行った。術後抗結核薬を1年間投与した。3年の経過観察を行ったが再発はなく、変形や脚長差も全く認めなかった。骨端軟骨の病変に対して、再発を起こさないように十分に、かつ成長障害を起こさないよう必要最小限に処置するためには鏡視下手術が最適な手段であると考えられた。

### 主題Ⅰ 座長：富沢仙一

#### 1. 両上肢欠損を伴った先天性内反足の1例

神奈川県立こども医療センター整形外科

○町田治郎・中村直行・山口 優

宮坂康之・奥住成晴

【目的】両上肢欠損に合併した先天性内反足の1

例を報告し、当センターにおける先天性内反足の手術法を紹介する。

【症例】症例は生後1か月で初診した男児で、主訴は両上肢の欠損と左足の変形であった。左上肢は上腕骨以下の完全欠損で、右上肢は上腕骨近位が痕跡程度に存在した。左足は先天性内反足で亀下の分類で grade 3 であった。ギブス治療を10回行ったが、内反尖足変形が残存したため、生後1歳2か月で左内側解離術を行った。術後1年の現在、足底接地にて歩行可能で、両足でおもちゃを保持し遊ぶことができる。

【考察】亀下法による距踵関節を解離しない後内側解離術では、手の代わりとなるような柔軟な足の再建も可能である。

## 2. 先天性内反足に対する Ponseti 法の短期成績

国立成育医療センター整形外科

○日下部 浩・高山真一郎・関 敦仁  
森澤 妥・中川敬介・松本浩明

## 3. 先天性内反足の学童期運動能力の検討

公立長生病院整形外科

○見目智紀

千葉県こども病院整形外科

亀ヶ谷真琴・西須 孝・高澤 誠

## 4. 水野病院における先天性内反足の保存療法とその結果

水野病院小児整形外科 ○鈴木茂夫・城間隆史

過去2年間に、先天性内反足47例69足の治療を行った。このうち19例30足は出生後2か月以内に徒手の矯正を行った。矯正方法は月出法に準じて行い、矯正終了後にはデニスブラウン装具を装着した。9足(30%)にボンセットイのアキレス腱皮下切腱を追加した。月出法の特徴は無理のないリズミカル矯正であり、赤ちゃんは矯正中に寝てしまうことが多い。19足(63%)は臨症的にもX線的にも良好であったが、11足(37%)に何らかの問題を残している。11足中、2足にTalo-Calcaneal coalitionが判明し、1足は疾患の為治療中断した例であり、他の1足は生後50日より開始した例である。これら4足をのぞけば、73%に良好な結果が得られた。

## 主題II 座長：高山真一郎

## 5. 骨端線閉鎖後投球で生じた上腕骨内側上顆裂離骨折の1例

聖マリアンナ医科大学横浜西部病院整形外科

○笹尾三郎・三浦竹彦・石郷岡秀哉  
満地真理・増澤通永・小島 敦  
金子天哉・笹 益雄

## 6. 先天性多数指屈曲拘縮例に対する手指の機能再建について

### Reconstruction of the thumbs and fingers in congenital flexion contracture of multiple fingers

国立成育医療センター整形外科

○森澤 妥・高山真一郎・関 敦仁  
日下部 浩・中川敬介・松本浩明

Arthrogryposis multiplex congenita (AMC), Freeman-Sheldon syndrome (FSS) などの先天性多数指屈曲拘縮例では、母指は屈曲内転拘縮、母指以外の指は屈曲拘縮を呈すがこれらに対する治療方針を確立する目的で最近5年間の手術例を調査した。

症例は11例15手で、男性8例女性3例、手術時年齢は13歳~19歳(平均8歳)であった。術後経過観察期間は7か月~40か月(平均24か月)、術前の母指MP関節自動・他動伸展は共に-30~-125°(平均-75°)であった。全例で母指の手術を施行した。そのうち9手で母指以外の指の手術も施行した。母指に関しては、第1指間拘縮に内転筋切離・第一背側骨間筋筋膜切離に加えsliding flapを10手にopposed Z plastyを3手に施行した。屈曲拘縮に対しては全例、FPB、FPLの剥離を施行し、うち1手でFPBの切離、FPLのZ延長を、1手でFPBの切離、FPLのPLを用いた延長を施行した。対立伸展障害に対しては14手でEPB、EPLの剥離とAPB移行を施行し、うち1手で第一中手骨回旋骨切り術を追加した。1手ではMP関節固定術を施行した。母指以外の指に関しては手掌指皮線のところに横皮切をもうけ、拘縮を解離し、一部の症例では靭帯性腱鞘も切開した。皮膚の欠損には全層植皮を施行した。

【結果および考察】母指MP関節自動伸展は-50~15°(平均-11.8°)と改善を認めた。母指は第一指間の拘縮、母指MP関節の自動伸展、対立位保持の3点で評価し、おおむね良好な結果が得られた。母指以外の指に関しては術前と最終診察時の屈曲拘縮角(MP関節を他動的に伸展0°とし、その時のPIP関節の屈曲拘縮角)を測定、比較した。結果、術前平均47.2°から最終診察時平均22.1°と改善したが、改善の程度にはばらつきがあった。母指の手術ではMP関節の対立伸展再建が困難で、屈筋腱切離のみで伸展の力源が十分ないとMP関節は術後再び屈曲拘縮に陥る。これまで伸筋腱切離・示指伸筋腱移行術などを行ってきたが、術中に得られた伸展を維持することは困難であった。今回14手でAPB移行術を施行したが移行したAPBは母指の掌側外転、回内効果のみでなく、MP関節伸展力獲得に有効であった。また、これらの疾患は手指のみならず、手関節、肘関節にも問題をかかえていることもあり、それらの症例を供覧する。

## 7. 先天性橈骨列欠損手術例の長期経過報告

心身障害児総合医療養育センター

○大嶋浩文・四津有人・野村亜希子  
深澤克康・三輪 隆・柳迫康夫  
君塚 葵

## 8. 先天性橈尺骨癒合症に対する分離授動術

### —手技の工夫と問題点—

国立成育医療センター整形外科

○高山真一郎・関 敦仁・森澤 妥  
日下部 浩・中川敬介・松本浩明

先天性橈尺骨癒合症に対する分離授動術の経験と手技の工夫について報告した。2005年5月以後分離授動術を行った症例は21例27肘、男児18例、女児3例で、手術時年齢は4歳から13歳、平均7.3歳であった。症例の内訳は前方脱臼型10肘、後方脱臼型16肘、脱臼なし1肘、癒合範囲は

15 mm 未満7肘、30 mm 未満14肘、30 mm 以上6肘であった。術式はKanayaら方法に準じ、後骨間動脈脂肪付筋膜弁を切離した癒合部分に挿入した。本法で良好な成績を得るためには橈骨の異常な彎曲矯正が重要で、橈骨の短縮屈曲骨切りを前腕中央部で行う改良法は、回内外時の橈骨頭の偏芯性運動の改善に有用であった。術後観察期間は短い。獲得可動域は前方脱臼・中間位固定症例で回外55°回内30°、後方脱臼・回内位固定症例で回外35°回内46°であり、中間位固定症例でも前腕の回旋運動獲得により日常生活動作の改善が得られた。

教育研修講演 座長：笹 益雄

「これからの小児整形外科医療について」

近畿大学整形外科教授

浜西千秋先生